

研究主題 「社会的事象を多面的・多角的に考察する力を高める

中学校社会科指導の在り方

—生徒が地理的な見方・考え方を働かせることを通じて

「社会的事象を相互に関連付けることができる学習指導の工夫—

東京都教職員研修センター企画部企画課

大田区立南六郷中学校 主任教諭 種藤 博

第1 研究のねらい

現代社会はグローバル化、情報化、技術革新が進み、状況は日々変化している。このような変化の激しい社会では、紛争、貧困等、様々な社会の課題が山積している。これら社会の課題は、多様な考え方の人々と知恵を出し合って解決するとともに、子供たちが住む地域をはじめ、国際社会にまで視野を広げて考察する必要がある。このような場合に重要なのは、社会的事象を様々な側面や角度から分析し、考える力を育成することである。そして、この力を育むためには「社会的な見方・考え方を働かせ」た学習をすることが必要である。

中学校学習指導要領（平成29年3月告示）（以下、「新学習指導要領」と表記。）社会地理的分野目標（2）に「地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を、位置や分布、場所、人間と自然環境の相互依存関係、空間的相互依存作用、地域などに着目して、多面的・多角的に考察したり」とある。「平成29年度東京都立高等学校入学者選抜学力検査結果に関する調査報告書」によると、複数の地理情報や地理的事象を関連付けて考察する学習の充実が求められている。以上のことを踏まえると、地理的な見方・考え方を働かせた学習が重要であることが分かる。そこで、本研究では地理的な見方・考え方を働かせることで、社会的事象を比較・関連付けることができ、多面的・多角的に考察する力が高まると考え、本主題を設定した。

第2 研究仮説

地理的な見方・考え方を働かせた追究を行えば、社会的事象を相互に関連付けることができ、社会的事象を多面的・多角的に考察する力を高めることができるだろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

「社会的事象を多面的・多角的に考察する力」や「地理的な見方・考え方」に関わる授業実践や理論研究、東京都多摩地区教育推進委員会第17次計画報告書「コミュニケーションの充実を図る教育活動の推進 - 協同的な関係を築き、集団としての学習力を高めるために -」（平成24年2月）等から、以下のことが明らかになった。

(1) 「社会的事象を多面的・多角的に考察する力」を高める学習指導

地理的な見方・考え方を働かせた追究を行うためには、社会的事象を相互に比較・関連付ける学習を取り入れることが有効である。その際、生徒同士がグループの中で、情報の受信や情報の整理・分析、情報の発信、グループごとに相互評価をすることで、他者の意見から自分の思考を再構成し、社会的事象を多面的・多角的に考察することができる。

(2) 生徒が課題を見だし、課題を追究する授業の有効性

地理的な見方・考え方を働かせた追究を行う際に、生徒が社会的事象から見いだす学習の課題を、自分自身に関わる切実な問題として認識することが大切である。そこで、単元の導入に

教師が生徒に事実認識を基にした学習の課題を見いだす場面を設ける。グループの中で、生徒は資料や既習知識を基に、疑問をもち、他者の意見を受け止める。そして、自分の疑問と比較・関連付けながら分析し、他者へ発信することにより、社会的事象の政治・文化・社会等の側面から学習の課題を見いだすことが可能となり、生徒が意欲的に学習することができる。

(3) 地理的な見方・考え方

新学習指導要領の目標では、地理的な見方・考え方を「位置や分布、場所、人間と自然環境との相互依存関係、空間的相互依存作用、地域」と示している。そして、この5つを複数用いて学習の課題を見いだすことにより、追究したことを基に小集団間で相互評価することにより、社会的事象の相互の関連に着目して、多面的・多角的に考察する力を高めることができる。

2 調査研究

(1) 調査の概要

平成29年9・10月、都内公立中学校1校・第2学年の生徒202名を対象に、「社会科の学習内容に関する実態調査」を質問紙法により行った。調査目的は、①地理的分野・歴史的分野における社会的事象についての理解や事実認識を把握すること、②検証授業前後において①を比較することで、社会的事象についての理解や事実認識したことの変化を把握することである。

(2) 調査の結果と考察

社会的事象を、政治・文化・社会等の側面（多面的）から理解できた生徒の数は、189名中78名であった（41.2%）。また、社会的事象を様々な角度（多角的）から事実を認識できた生徒は、78名中21名（26.9%）だった。さらに、生徒の記述を分析していくと、社会的事象の用語のみで、文章に相互の関連が見られる記述はあまりなかった。

以上のことから、生徒が「社会的事象を多面的・多角的に考察する力」を高めるためには、地理的な見方・考え方を働かせ、社会的事象を相互に関連付ける手だてを、指導計画において意図的・計画的に取り入れる必要があることが分かった。

3 開発研究

研究主題に迫るために、以下4つの手だてを用いた単元開発を行った。

(1) 学習の課題における共有化

社会的事象の政治・文化・社会等の側面から学習の課題を見いだすことができるようにするため、他者と自己と考えを比較・関連付けながら分析し、グループ内において情報を共有する学習場面を設けた。その際、生徒同士が資料の読み取り、解釈したことや既習知識等を基に疑問や情報を共有したり、教師が生徒の多様な意見を整理したりして、助言するようにした。このことにより、グループ内で学習の課題が共有化され、生徒の主体的な追究になると考えた。

(2) 地理的な見方・考え方をを用いた資料提示

生徒が追究するとき、資料を読み取り、解釈して、社会的事象を相互に関連付けることができるように、教師は地理的な見方・考え方をを用いた読み取り、解釈ができる資料提示を行った。これより、生徒個人が5つの地理的な見方・考え方をを用いた追究ができると考えた。そして、次の単元以降、この地理的な見方・考え方をを用いて資料を選択し追究ができると考えた。

(3) 立場を明確にし、自らの考えを表現し合う交流活動

追究した結果を説明するために、自分の立場を明確にして、A4用紙1枚の紙（レジュメ）

「社会的事象を多面的・多角的に考察する力を高める中学校社会科指導の在り方
 -生徒が地理的な見方・考え方を働かせることを通じて
 社会的事象を相互に関連付けることができる学習指導の工夫-」

や発表で重要なキーワードやグラフ等を画用紙(フリップ)にまとめるようにした。発表会で他のグループの発表を聞き、追究する立場によって様々な社会的事象の相互関連があることに気付かせることができると考えた。

(4) 社会的事象を多面的・多角的に理解する交流活動

発表会で聞き取った内容を基に10年後の産業を発展させるための方法を考えさせた。それについて、グループごとに意見を交流させることにより、自ら追究する立場に加えて自分と異なる複数の立場から地域的特色を考察して論述することができると思った。

4 検証授業

表1 検証授業の概要

時	生徒の学習活動	教師の手だて	言語活動
1	九州地方の位置、自然環境を理解する。		
2	九州地方の産業の主な特色を理解する。資料を読み取り、問いを設定する。	(1)課題の共有化	読み取り
3	設定した問いに対する仮説を考え、追究活動を行う。問いに対する資料を解釈する。	(2)地理的な見方・考え方の視点をういた資料提示	解釈
4	追究した結果を、レジュメやフリップにまとめる。	(2)地理的な見方・考え方の視点をういた資料提示	説明
5	自分たちの考えを発表する。	(3)立場を明確にし、自らの考えを表現し合う交流活動	説明
6	第5時の発表を基に、10年後における九州地方の産業のあるべき姿を考える。	(4)社会的事象を多面的・多角的に捉える交流活動	論述

(1) 授業の概要

都内公立中学校

(6学級・202名において、第2学年地理的分野「日本の諸地域」

九州地方(6時間)の

授業を実施した。検証授業の概要は、表1のとおりである。

(2) 学習の課題における共有化による社会的事象を多面的・多角的に考察する力の高まり

第2時では、生徒が2グループずつ、九州地方の産業を三つの立場(農林水産業、鉱工業、観光業に従事する人)を選択した。次に、教師が九州地方の産業と自然環境の関わりに着目できる資料(教科書の写真、グラフ、地図等)を用いて発問した。生徒はグループ内で、発問に対して資料から読み取り、解釈したことや既習知識から導き出された疑問、意見について、他者の意見を受け止めたり、自らの疑問を他者へ発信したりして情報を共有した。そして、産業従事者の立場で追究する学習の課題をグループごとに見いだした。あるグループは、水と産業の関連を「熊本県の豊富で美しい水と工業にはどんな関係があるのか。」という学習の課題を見だし、第3時以降課題を追究した。

一人の生徒は、資料から熊本県における工業の特色を読み取り、自然環境との関連をまとめ、第5時で発表した。そして、他グループの発表を踏まえ、自然環境に加えて、歴史の側面から考察することができた。第6時では、グループごとの交流活動により様々な角度から考察した結果を記述できた(表2)。更に、自然環境に着目した「九州地方における米の生産量が減少した理由は何か」や「なぜ九州地方の各県に観光客数の差があるか」等、学習の課題を見いだすことができた。

表2 問いの共有化による生徒記述の変化：下線は、生徒の地理的な見方・考え方に関わる記述である。

第1時	第2時(調べたいこと)	第3時(調査内容)	第5時(発表会後の感想)	最終レポート
【観察】クラスで挙げられた各県の有名なものを、プリントに写している程度だった。記述はあまりない。	<p>鉱工業</p> <p>【理由】自動車がある。水(熊本)</p> <p>【理由】農業水産、<u>鉱工、観光地</u>すべてにつながるよ<u>うだから。</u></p>	<ul style="list-style-type: none"> 主にスイカ、メロンを栽培 →<u>水・環境がよい、林業がさかん。</u> 熊本は九州で電子部品の製造品出荷額の割合17.8%。 熊本の東側から南部中心にかけて工業が少ない。<u>海側と北部</u>の中心に工業が<u>さかん。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> 水は工業にとっても重要なものである。 鹿児島県は農林水産業がさかん =日本有数の農業県。 佐賀県と福岡県の境目に空港があり、両方に行ける。 <p>【まとめ】九州は、<u>歴史的建造物が多くあり自然環境</u>がとてもよい。</p>	<p>工業があまり発展していない事について、解決策として九州全体で協力することが大事です。詳しく言うと、<u>1班が説明していたのと同じで新幹線</u>を使い、各地からのICチップや部品を福岡に送ります。そして、<u>海外への輸出が便利な福岡県</u>から外国へ輸出します。</p>

(3) 地理的な見方・考え方をを用いた社会的事象を多面的・多角的に考察する力の高まり

グループで見出した学習の課題を基に生徒が考察する際に、教師は生徒の既習知識を引き出し、その知識の根拠となる資料を用意した。例えば工業の発展について、学習の課題を「八幡製鉄所から始まる工業はなぜ発展してきたのか」と見いだしたグループでは、北九州工業地域における地域に着目した生徒や、人間と自然環境との相互依存関係に着目した生徒がいた。

地域に着目した生徒は、九州地方では自動車を生産しており、それが貿易と関係があることに気付いていた。生徒は、グループ内の情報共有から、沿岸部に自動車の部品や組立工場が集中している資料を見付けた。教師は、過去に製鉄の生産量が多かった理由を読み取ることができる資料を提示して、社会的事象における複数の側面から学習の課題を見いだすことができるようにした。また、人間と自然環境との相互依存関係に着目した生徒は、中国からの鉄鉱石輸入により、北九州に八幡製鉄所があったことを理解した。そして、教師が示した資源分布の地図から、生徒はかつて北九州が製鉄のさかんな地域であったことに気付いた。これらにより、グループは地域的特色（工業）を場所（沿岸部）と人間と自然環境の相互依存関係（資源）に加え、空間的相互依存作用（貿易・輸送）との関連に気付いたと言える。

5 事後調査

検証授業実施後(10月)に、実施校にて、検証単元の内容を踏まえた実態調査を行った。検証授業実施前(9月)の調査研究時の結果と比較し考察した結果は以下のとおりである。

社会的事象を、政治・文化・社会等の側面(多面的)から理解できた生徒は、検証授業後の事後調査において189名中144名(76.2%)であった(図1)。

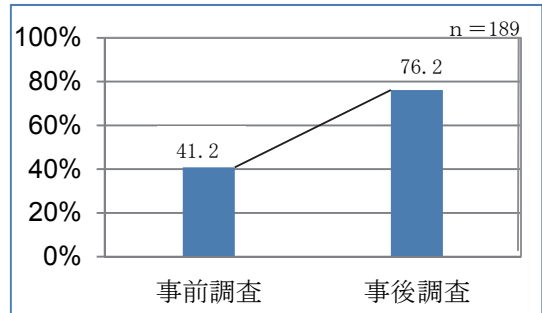


図1 社会的事象を政治・文化・社会等の側面から理解できた生徒の変容

事前調査において、社会的事象を政治・文化・社会等の側面(多面的)から理解できなかった113名のうち、66名(58.4%)が検証授業後に捉えることができた。また、144名のうち多くの生徒が多角的に事実を認識して、事象における相互の関連付けをした記述が見られた。

第4 研究の成果

事前調査と事後調査を比較して、事前調査では社会的事象を捉えた側面の平均は1.6であったが、事後調査のそれでは2.4に上昇した。このように、生徒が課題を見いだして追究することや、生徒が地理的な見方・考え方をを用いて読み取り、解釈できるように資料提示することにより、社会的事象を相互に関連付けて地域的特色を理解することのできた生徒が増加した。これは、社会的事象を多面的に理解することができた生徒が増えたと言える。

第5 今後の課題

本研究では、189名中47名の生徒が社会的事象を多面的に考察することができなかった。その理由は、学習の課題における共有化により一人一人の生徒の疑問から、学習の課題を見いだすことにつなげられなかったからである。今後は、教師が資料を提示しながら、生徒に単元で取り上げる社会的事象に疑問をもたせることが課題である。そのためには、基礎的な資料活用の力を高めるとともに、他の単元でも、社会的事象の政治・文化・社会等の側面から学習の課題を見いだすことができる指導計画の作成をしていく。